

第3節 ウルトラマンで須賀川市を救えるか

五十嵐茜

1. 須賀川市における「ウルトラマン」による地域活性化について

須賀川市は、ウルトラマンやゴジラの生みの親で「特撮の神様」とよばれた円谷英二氏の出身地である。そしてその須賀川市では現在、ウルトラマンを生かしたまちおこしが活発に行われている。

先の東日本大震災では、全国的にはあまり報道されなかったが、福島県中通り地方、その中でも須賀川市を中心とした岩瀬地方でも地震による被害が大きなものであった。街の中心部にあった、公共の施設総合福祉センターをはじめ、銀行、商店などが損壊し、街の景色が大きく変容した。

行政では震災後の復旧復興のとりくみとして須賀川市第7次総合計画「須賀川市まちづくりビジョン2013」を策定した。柱になる「市民自治の精神」や「須賀川に対する愛着、誇りといった価値観や意識の共有、共感」という方向性のなかで「ウルトラマン」によるイメージアップの戦略が生まれていった。実際「イメージアップ戦略の展開」という実施計画の中に、「地域資源の活用によるイメージアップの取り組み」というものが含まれており、ここでの地域資源として「ウルトラマン」が活用されていると考えられる。¹

2. 民間による「ウルトラマン」の導入

須賀川市では行政が「ウルトラマン」というキャラクターに着目、活用するよりかなり以前から民間による円谷英二氏の今までの功績を生かした町おこしが試みられていた。

最初に試みられたのが、1980年代後半、須賀川青年会議所による「ゴジラの里」構想である。市近郊の山には「ゴジラのシルエット」阿武隈川沿いの滝には「ゴジラの卵」がつくられ、また市内では「ウルトラマンパン」や「ウルトラマンパン」が販売されていたり、ペイントが施された電気ケーブルボックスが登場した。それらの活動を支えているのは、須賀川市の青年会議所のメンバーで結成された「サークルシュワッチ」である。

「サークルシュワッチ」は、円谷英二監督の功績を後世に伝えるために結成され、現在も年に1度、「サークルシュワッチ」が主体となって「ウルトラファミリー大集合」というイベントが行われている。このイベントには毎年県内だけでなく、県外からも沢山の人が訪れている。

そうした取り組みが活発だった私の幼い頃は、街中にはウルトラマンスタンプ会ののぼりかはためき、夏や秋に行われる祭りには円谷プロダクションから購入したといわれるウルトラマンやバルタン星人の着ぐるみが必ずといっていいほど出没し、「須賀川市はウルトラマンのまちなのだ」というイメージがこども心にも植え付けられていたような気がする。しかし、次第に中心市街地の活気が低迷するのと比例し、ウルトラマンと須賀川市の関係性も薄れかけていき、市民はウルトラマンについて関心をもたなくなっていくようだった。

ところが、震災復興という思いがけないおおきなうねりのなかで、再度「ウルトラマン」が須賀川市を救うことができるかもしれない存在として注目され始めたのだ。

3. 震災後の行政の動き

¹ 須賀川市第7次総合計画「須賀川市まちづくりビジョン2013〈概要版〉」

須賀川市では震災後に行政によるウルトラマンを生かしたイメージアップ戦略が活発に行われるようになった。主な震災後のウルトラマンを生かした須賀川市のイメージアップの動きとしては、次の六つの事例が挙げられる。一つ目は、ウルトラマンの故郷である「M78 星雲 光の国」との「姉妹都市」の提携が挙げられる。この姉妹都市提携は 2013 年 5 月 5 日に提携され、「すかがわ市 M78 光の町」と名付けられた仮想の町が誕生している。

次に二つ目の事例としては、仮想都市「すかがわ市 M78 光の町」の住民登録・住民票発行の実施である。須賀川市は「すかがわ市 M78 光の町」のホームページを設け、誰でもインターネット上で住民登録ができるようになっていた。住民登録者数は 2673 人となっている(2014 年 6 月 23 日現在)。登録をすると「すかがわ市 M78 光の町」の住所、坪数などが与えられる。また、住民票の発行も可能だが、有料となっている。²

三つ目の事例としては、ウルトラマンのデザインを使った原付バイクのオリジナルナンバーの導入が挙げられる。これは 2014 年の 1 月 6 日より交付が始まった。このウルトラマンのナンバープレートは、2014 年 3 月に市制施行 60 周年を記念して交付したもので、交付式にはウルトラマンも駆けつけた。このウルトラマンナンバープレートは三種類あり、ウルトラマンナンバーと従来型ナンバーは選択制で、交換する場合も手数料は無料である。³

次に四つ目の事例として、2014 年 4 月から、転入者と出生届を出した市民にウルトラの父のメッセージを無料配布することが挙げられる。出生届には「君に幸せが訪れるように勇気と希望のエネルギーを贈ろう」、転入届には「君の活躍を M78 星雲から応援している」などと書かれている。⁴

五つ目の事例として、須賀川市では防災力強化の一環として市内各所に防災無線を設置したのだが、その防災無線から朝夕流れる曲がウルトラマンの曲になっている。朝は 7 時に「ウルトラマンセブン」が、夕方は 17 時半には「帰ってきたウルトラマン」が流れるようになっている。

最後に六つ目の事例として、須賀川市駅前のロータリーにウルトラマンのモニュメントの設置をしたことが挙げられる。いままでは須賀川市のちょっとした名所となっている。

以上挙げたように、行政によるウルトラマンを生かしたイメージアップ戦略は多岐に渡っている。

4.民間と行政の橋渡し⁵

須賀川市のウルトラマンを活用してのまちおこしについて、以下須賀川市の市議会議員であり、結成当初からの「サークルシュワッチ」のメンバーである人物とのインタビューをもとに提示したい。次の 3 つの項目に分けて質問をした。一つ目は、「民間によるウルトラマンを活用したまちおこしについて」である。特に結成の経緯とその現状についてである。二つ目は、「行政によるウルトラマンによるまちの活性化について」である。「サークルシュワッチ」と

² 須賀川市 HP「すかがわ市 M78 光の町」<http://m78-sukagawa.jp/>

³ ねとらぼ HP「須賀川市でウルトラマンのナンバープレート交付開始(2014 年 1 月 7 日)」(最終閲覧 2014/6/23) <http://nlab.itmedia.co.jp/nl/articles/1401/07/news127.html>

⁴ 福島民報「ウルトラカード交付 須賀川市出生、転入届市民に(2014 年 4 月 2 日)」(最終閲覧 2014/7/6) <http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20140402-00000015-fminpo-l07>

⁵ 2014 年 6 月 15 日における大越彰氏へのインタビュー

行政の関わり、どういう経緯で震災後行政のウルトラマン活用が活発になったのかを中心に話を聞いた。3つ目の項目は、「ウルトラマンを活用してまちおこしをすることに対しての今後の展開と課題」についてである。民間で活動する「サークルシュワッチ」に所属し、市議会議員として行政に関わる立場から、ウルトラマン活用についての課題を聞いた。

(1) 民間団体「サークルシュワッチ」によるまちおこし

「サークルシュワッチ」は、1992年に青年会議所が、須賀川市出身の特撮監督の円谷英二氏の功績を継承するため、有志メンバーで結成したのがはじまりである。当時メンバーで、「須賀川市に来ればウルトラマンに会える」という環境が作れるといいなという話をしていたそうだ。

元々「サークルシュワッチ」が結成される以前にも、円谷英二氏の功績を継承する活動は行われていたという。それは「ゴジラ」を活用しての活動であった。なぜ最初にゴジラを選んだかには2つの理由があったという。1つ目は、ウルトラマンよりもゴジラの方が世界的知名度が高く、世界に須賀川市を発信できると考えたからである。2つ目は、著作権の問題のためである。ゴジラの著作権は東宝、ウルトラマンの著作権は円谷プロダクションが所有しているが、ゴジラの著作権を所有する東宝からは「まちづくりの為なら著作権はいらぬ」という返答が返ってきたため、ゴジラを活用しようということになったという。しかし、ウルトラマンの方がキャラクターが沢山いて、子どもたちにインパクトがあるという点でウルトラマンを活用したまちおこしをしようということになり、「サークルシュワッチ」が結成された。「サークルシュワッチ」の活動として一番大きなものとしては、年に一度4月に須賀川市で開かれる「ウルトラマンファミリー大集合ショー」である。これは「サークルシュワッチ」が主催になり行われているもので、「ウルトラマンファミリー大集合ショー」という名前の通り歴代の全ウルトラマンが須賀川市にやってくる。そのため、県内だけでなく県外からもやってくる人が多数いる。ピーク時には、6,000人もの方が訪れたと言われている。

「ウルトラマンファミリーショー」以外にも、「サークルシュワッチ」は様々な活動を行ってきた。1992年には、福島空港の開港に伴い、大阪空港から来る一番機にウルトラマンとバルタン星人が乗ってやって来るというイベントを手掛けた。1995年には、「第50回ふくしま国体」の開催に伴い、同じく須賀川市の出身者である、1964年東京五輪のマラソン銅メダリストの円谷幸吉と合わせ「二人の円谷展」として二人の功績を称える展示を実施した。これは市からの要請を受けて「サークルシュワッチ」が動いたものである。

また2001年には須賀川市で開催された地方博覧会「うつくしま未来博」で、ウルトラマンを活用するために「サークルシュワッチ」が活躍する。この「うつくしま未来博」まで、市から要請を受けて活動することは何度かあったが、このときはじめて「サークルシュワッチ」と行政との間に大きな関わりが生まれたという。また同年には、円谷英二氏の生誕100年を記念して須賀川市立博物館で「円谷英二展」を開催した。この展示では、ウルトラマンの撮影風景の模型や、シナリオ、実際に円谷氏が自宅で使っていた机などが展示された。以上挙げたように、「サークルシュワッチ」は有志の集まりにも関わらず、活発に活動を続けてきた。

(2) 行政と「ウルトラマン」の関係性の変化

行政がウルトラマンを生かしてのまちづくりに大きく関わったのは2001年の「うつくしま

未来博」にてである。しかし、それ以降震災後まで行政が積極的にウルトラマンを活用してのまちづくりに関わることはなかったという。その理由として一番大きなものは、資金の問題であった。前にも述べたように、ウルトラマンの著作権は円谷プロダクションが所有しており、ウルトラマンを活用して何かをすとなると必ず著作権の問題が発生する。須賀川市は財政的にも厳しく、ウルトラマンにお金をかけられる状態ではなかったという。また、ウルトラマンにお金をかけることに、市民から理解が得られないのではないかという意見もあったという。

円谷プロダクションでは、震災後に復興支援プロジェクトを立ち上げ被災地支援を行ってきた。また「ウルトラマン基金」という募金活動も行い、1億円以上の支援を得ていた。また、現地訪問も行っており、岩手県、宮城県などへウルトラマンが訪問している。須賀川市には、円谷英二氏の生まれ故郷ということで、2回ほど訪問している。その際には、他県から応援に駆け付けている警察官たちを「ウルトラマン警察隊」と名付け、そのパトカーに貼るロゴも提供した。そういった経緯から、須賀川市とウルトラマンの故郷である「M78 星雲 光の国」との姉妹都市提携が可能になったのだ。須賀川市と円谷プロダクションとの距離が縮まっただけでなく、「須賀川市まちづくりビジョン2013」での計画の中に、「イメージアップ戦略の展開」という項目が設けられたことも行政が活発に活動するようになった理由と言える。また、そのイメージアップ戦略を展開していくために必要な経費をまかなうことのできる福島県から7,000～8,000万円ほどの支援金があることも大きな理由である。

(3) 今後の展開と課題⁶

今年で行政によるウルトラマンを活用してのまちおこし活動は二年目を迎えている。二年目の活動の活動として次の3つのことが決定している。まず一つ目が、街中に4体ほどのモニュメントの設置である。もっと街中にウルトラマンを置くことで、よりウルトラマンの故郷と姉妹都市を結んだ市であることを強調したいという。二つ目は、バスにウルトラマンの絵を描くということだ。バスといっても民間のバスではなく、市が保有する福祉バスに限定される。最後に三つ目は、ウルトラマンが出演する観光ビデオの制作である。このビデオを制作して、より須賀川市の知名度をあげ、イメージアップをはかっていきたいという。

4.ウルトラマン商店街（祖師谷商店街）の事例⁷⁸

須賀川市と同様に、ウルトラマンで街の活性化を図っている商店街として、東京都世田谷区祖師谷周辺商店街がある。

平成16年、世田谷区が区内PRをするため若手職員の新しい感覚を生かしたプロジェクトチーム「世田谷売り込み隊」を編成し、その一つのチームがウルトラマンによる街づくりを提案したのであった。砧7丁目が円谷プロダクション創業の地であったことから『祖師谷、砧地区は円谷プロダクション、ウルトラマン発祥の地』という観点で祖師ヶ谷大蔵駅前整備にウルトラマンが使用された。その経緯から、祖師ヶ谷大蔵に隣接する3つの商店街（祖師谷昇進会商店街、祖師谷商店街、祖師谷みなみ商店街）に行政側からウルトラマン商店街をつくらないか

⁶ 『日刊マメタイムス』（2014年6月6日付）「須賀川市議会6月定例会」

⁷ うるしょう.com(最終閲覧2014/6/29) <http://www.ulsho.com/>

⁸ ウルトラマン商店街HP（最終閲覧2014/6/29）<http://www.ultraman-shotengai.com/>

とアプローチがあり、行政・円谷プロダクション・三商店街で協議を行い平成17年4月『ウルトラマン商店街』が誕生した。このとき、円谷プロダクション側からは「地域活性になるなら」と協力が得られ、それがなければウルトラマン商店街は誕生しなかったという。

ウルトラマン商店街では駅前にウルトラマン像が立ち、案内板、車止め、街路灯が設置されている。また街の各所にウルトラヒーローがいる。ソフト面では、公式ホームページや公式フェイスブックをもちイベント情報などを発信している。またウルトラマンスタンプを発行しポイントによるサービスを展開している。これは須賀川の商店街でも行っていたが、数年前にそのサービスを停止している。

都内という立地もあり、TVや雑誌でもたびたびとりあげられているようである。

5.ウルトラマン効果と可能性

震災後の須賀川市でのウルトラマンによる街の活性化は、TVやラジオ、新聞による報道によりその認知度がある程度高まったと思われる。しかし、現在も須賀川市の中心部は人通りも少なく、それによって経済的な波及効果にはつながっているとは考えにくい。

ウルトラマンを利用して活性化を図っている商店街として、祖師谷大蔵周辺のウルトラマン商店街の取り組みがあるが、そこでは今も活発に活動が行われている。人口密度の違い、商店数の違いは大きな要因であるが、それ以外の何かがあるのだろうか。須賀川市のほうが早くから「ウルトラマン」に着目し取り組んでいたにもかかわらず、うまくいかなかったのはなぜなのか。須賀川市の場合、郊外型大型店の進出という時代の流れが一番大きかったのではないかと思われる。

中心商店街が震災後減少し、買い物客を呼び込んでの活性化は現状では困難かもしれない。しかし、現在、中央商店街の核として建設計画が進められている須賀川市の総合福祉施設(仮称：市民交流センター)に期待したい。図書館、公民館、子育て支援施設など、ワークショップを通して市民の意見を取り入れながら再建される。⁹施設が完成すれば、商業的活性化だけでなく、文化的活性化が促進されることだろう。

私が生まれ育ったまちの行事や街並みを思い起こすとき、「ウルトラマン」のいた街と思い出すように、次の時代を担う若い世代にもウルトラマンのようなキャラクターを生み出したふるさとの偉人に思いをはせ、ふるさとに対する愛着心を抱いてもらうことに意味がある。震災後、須賀川市の行政が「ウルトラマン」を取り入れているのは、単に観光による街おこしだけではないというのは、そのねらいがあるからである。

こどもたちには今も「ウルトラマン」は人気があるキャラクターだ。イベントがあれば沢山の親子連れが集まる。ただ、須賀川市が本当に「行ってみたい街」「住んでみたい街」「住んで良かったまち」「住み続けたいまち」であるために、「ウルトラマン」で何ができるのか、大切なのは何が必要なのか、行政の動きを見守りながら、そこをふるさとに持つ一成人としてできることを考えていきたい。

⁹ 『あぶくま時報』(2014年7月1日付)「(仮称)市民交流センター」